みんなの広場

はっらつ ところ 野老っ子

誰もを幸せにする指揮者に…。

米崎　栄和（しげかず）さん
（中新井在住）

「台所の菜ばしを指揮棒代わりに…」。有名指揮者の名を借りて『カラヤン指揮棒第1号』と命名し、菜ばしを振っていた中学生が今、世界の舞台へ。

昨年9月、フランスで行われたブザンソン国際指揮者コンクールで最高位を獲得した米崎さん。中学2年生のとき、テレビで見たカラヤンに憧れ、指揮者になる夢を抱き、現実のものとしました。

小学1年生のときにお姉さんに連れられ、ピアノを習ったのが音楽への第一歩。1年でやめましたが、5年生のときに有名ピアニストのレコードを聴いて感動し、再び中学1年生まで習いました。

小さいころから音楽好きで、特に歌謡曲が好きだった少年時代。牛乳びんをマイクにアイドルのまねをすることもあったとか。また、野球も好きで、小・中学生のときにはバットを振っていました。

高校・大学では部活動でフルートを担当し、学生指揮者としても活躍。親の反対で音楽大学ではなく理科系大学へ進みましたが、指揮者になる夢は募るばかりでした。

大学卒業後は、大学院で超伝導の研究をし、貴金属開発会社へ就職。4年間の在職中はアマチュアオーケストラの指揮をするなど指揮活動も続けていました。

そして、年齢からも最終決断となった30歳のとき。「不安はあるが今しかない」と会社を辞め、指揮だけに専念する道を選びました。

指揮法や理論などを基礎から学んだ音楽大学での3年間を含め、本格的に勉強を始めて4年で、見事コンクールで結果を残したのです。「周りの人たちを幸せにするという気持ちが好結果につながった」と音楽・指揮の原点を大事にしています。「音楽には人を幸せにする力があり、その音楽をいろいろな人と創り上げることが指揮の魅力」と語ってくれました。

「ミューズは音響効果など素晴らしいホール」と語る米崎さん。所沢での指揮経験はありませんが、夢を与える指揮者、米崎さんに出会える日も近いかもしれません。

「世界を股にかけて活躍したい」と語る米崎さん宅の押し入れでは、今も『カラヤン指揮棒第1号』が人知れず輝いています。

音楽的なジェスチャーと豊かな創造力

▲光の競演。鮮やかなイルミネーションが街を行く人の目を引き付けます。（フィルター使用）
12月6日㈯／所沢駅西口・ロータリー

TOKOROZAWA ものしり ウォーキング 45

東町・庚申堂

元禄11年建立の庚申塔

今年は申年ですが、身近な路傍にも「猿」がいるのをご存じですか。

その猿というのは庚申塔に彫られた三猿（みざる・きかざる・いわざる）のことです。

庚申塔は、庚申信仰によって建てられた石仏で、江戸時代以降、各地で盛んに建てられました。市内にもたくさんの庚申塔が確認されています。

庚申とは十干の庚と十二支の申のことで、60日に1度回ってくる庚申の日に行われる行事からきています。庚申信仰というのは、人の中にいるとされる三尸の虫が天に罪過を告げないよう、庚申の日に一晩中寝ないで起きているという民間信仰です。この徹夜のことを庚申待などといいます。

庚申塔には、大きく2つのタイプがあります。1つは、青面金剛などの像が彫られたもので、もっとも基本的な型です。もう1つは、「庚申」あるいは「庚申塔」と刻まれた文字塔です。

青面金剛は、病魔や病鬼を払い除くとされ、庚申信仰の本尊にされています。青面金剛像が彫られた庚申塔の一般的な型は、青面金剛像の下に邪鬼や猿などが配置されています。猿は青面金剛の使いとされ、「申」に通じると考えられています。三猿の数は、三尸の虫が3匹いることと関係しているようです。庚申塔の猿の配置は定まっていませんが、大抵は「きかざる」が中央になっています。

東町の庚申堂

市内で最も古い庚申塔は東町の庚申堂前にあり、寛文3年（1663）に建立されたものです。ここには、ほかにも元禄11年（1698）や宝永7年（1710）建立の庚申塔が立ち並んでいます。

お堂は、明治時代までは現在の飛行機新道の入り口にありましたが、新道の建設により現在地に移されました。庚申塔も、もとはどこにあったものかわかっていません。各地に残された庚申塔も、道路整備や開発によって本来の場所から移されたものが少なくありません。

庚申塔に刻まれた猿には、おもしろい表情をしたものもあります。申年の今年、市内に建っている庚申塔の「猿」を観察してみてはいかがでしょう。

街かど ズームイン

▶皆さんからの「街かどズームイン」情報を募集▶採用者には事前に連絡します▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集▶はがきに300字以内で▶文章は添削あり▶掲載者には記念品を進呈▶次回のテーマは「魔法」▶魔法を題材にした懐かしいテレビアニメやドラマを覚えていますか▶いたずらな、ほほえましい、そしてピンチを救う魔法▶もし、魔法が使えたらどうしますか▶皆さんの魔法への思いをお寄せください▶締め切りは1月14日㈬必着▶住所・氏名・年齢・電話番号を明記▶送り先：〒359-8501・並木1-1-1所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係

▲歌声は国境を越えて…。姉妹都市締結5周年に実りある交流の「安養市立少年少女合唱団所沢公演」。
11月28日㈮／ミューズ・大ホール

▲秋晴れの中、さわやかな風が参加者の足取りを軽くさせていました。「狭山湖・多摩湖歩け歩け大会」。
11月23日㈷／狭山湖・多摩湖周辺

少々イマ小 ふれあい館「エコロ」不用品ガイド

- **譲ります**　▷インラインスケート▷ベビーベッド▷ルームウォーカー▷剪定（せんてい）ばさみ▷レーザーディスク▷バギーカー▷電子オルガン▷オイルヒーター▷ホットカーペット▷剣道着▷スタッドレスタイヤ▷スキー板▷スキーキャリア
- **求めます**　▷ノートパソコン▷ベビーカー（A型・B型）▷布オムツカバー▷木製ベンチ▷パソコンチェア▷家具調こたつ▷電子ピアノ▷台車▷電子レンジ▷○Aデスク▷一輪車▷カメラ▷毛布▷羽毛布団

受付方法　電話による先着順で紹介します。
休館日　月曜日、祝休日（1月13日㈫は東所沢エコステーションも含め休館）
申し込み・問い合わせ　リサイクルふれあい館（☎994-5374・FAX994-1118）

とことこ 町内会めぐり

【新所沢地区・三商青葉台自治会】
～家族をつつむまちづくり～

三商青葉台自治会の前身となる三商自治会は、昭和39年に設立されました。「三商とは何からつけたのですか」とよく聞かれますが、民間の開発業者の名の一部をとり命名されました。

設立当時、飲料水は井戸水であったことから、環境整備のためのさまざまな取り組みが始まりました。私設水道を引くための組合の設立、下水道組合の設置、活動拠点となる自治会館の建設などに、先輩方のご苦労は大変なものだったと思います。

現在、300世帯からなる「三商青葉台自治会」は新所沢地区に所属し、富岡地区に所属する「三商北中自治会」と分かれてそれぞれ活動しています。

このような中、三商自治会館の共有をはじめ、親睦を目的としたボウリング大会、最大イベントの子どもまつり、児童対象の人形劇鑑賞会を合同で行っています。子どもたちも含め、地域の方々もとても楽しんでいます。

笑顔の子どもたち

そして、平成13年からは、集団資源回収事業にも積極的に取り組み、大きな成果を上げています。さらに、砂川堀せせらぎ遊歩道や自治会館の清掃などに、会員の皆さんのご協力をいただいています。

これらの地域のご協力に感謝しつつ、高齢化社会が進む中で今後の自治会のあり方を考え、魅力あるまちにするために、より一層の知恵を絞りながら活動していきたいと考えています。

誰でも エッセイ

テーマ　お年玉

初めてのお年玉

若狭・大澤　美江

次女が社会人になって初めてのお正月。お祝いの膳が終わり、私は空の器を片づけていた。次女は小声で小学生の弟を呼んだ。弟がそばに行くと、はんてんのそでからお年玉を取り出した。弟は驚きながらも、うれしそうな顔をしていた。そして、少し恥ずかしそうな顔もしていた。

「よかったわね」と私は息子に言って部屋を出ようとした。すると、次女は私にまでお年玉を差し出したのである。私は驚いて「えっ?」と。

あれから12年の時が過ぎた。2人の娘は結婚し、息子は社会人となり、それぞれ家を離れ歩んでいる。しかし、変わらずに続いているものがある。それは12年前からのお年玉。次女は私のことを子どもだと思っているのかもしれない。実際、子どもたちは親を超えてしまっている。

期待にワクワク

下富・細渕　春夫

昭和40年代ごろまでだったか。私たちの年代がお年玉を楽しみにしていたのは。冬休みに入り、クリスマス、大みそか、そして年明け。「あのおじさんはいくらくらいくれるだろう」「おばさんは去年より多いかなあ」など胸がワクワクしたものだった。遊んでいても、お客さんの来る時間が気になった。

期待どおりだったり、がっかりだったり。当時は、千円札が入っていると最高額で、五百円札、百円札のときもあった。別に欲しい物はなく親に預けたが、お気に入りの月刊誌だけは毎月買っていた。

結婚してからは、妻の姉弟が多いので出費も多くなった。もらう子どもたちはうれしいだろうが、あげる大人たちは大変だということがわかった。子どもたちには、お金と図書券にひと言を添えて渡した。もらったときの子どもの喜ぶ顔もよいが、何よりも親にお年玉を渡せるようになったときが一番うれしかった。

大みそか、1人こたつで袋にお金を入れる。間違わないように小さい印を付けて。今年も一番先に母にあげる。「今年もよい年であり、元気に長生きして」と願いを込めて…。

お年玉の思い出

久米・大神　慶子

小さいころ、私は田舎に住んでいました。お年玉をもらう人はあまりいなかったという記憶があります。でも、私には親戚が多く、お正月には大勢のおじさんやおばさんたちがお年玉をくれました。今のように多額ではないけれど、とても楽しみでした。

そして、本が大好きな私は、いつもそのお金で本を買い、隅から隅まで読みました。残ったお金は、大事にしながら飴などを買うのに使いました。子どものころの楽しかった思い出です。

「ありがとう」の気持ち

東所沢・勅使河原　亜矢

子どものころ、お年玉をもらうのは正直うれしかった。しかし、お年玉袋を開けて「やっぱり」とがっかりした気持ちになったこともあった。今となれば、大人の気持ちもわからず「なんて自分は失礼な人間なんだ」と思うが、当時は幼いせいか、まだ理解できなかった。

母は7人兄弟のため、私には14人のいとこがいる。あげる側の大人も大変だったのだろう。

正月が過ぎると、テレビで「お年玉の平均はいくらだったか」との二ュースが流れるが、子どもたちには、もらえて当然ではなく、「ありがとう」の気持ちを持ってもらいたいと思う。

母が残したもの

青葉台・飯島　敏枝

私は、母が亡くなった年齢よりも長生きしていますが、年齢ばかり重ねていても、息子たちに残すアフォリズム（警句）もない愚かな母です。

私の母は、いつの間にか脳裏に刻みつける箴言を孫たちに残してくれました。それはあとになって聞いたものです。

「お年玉はすぐに使ってはいけません。2月までゆっくり待って使いなさい」「粗末なおかすでも二コニコおいしそうに食べなさい」「返事はハイとはっきり言いなさい」などです。

息子は今、自分の息子たちに実行しています。

少年時代

並木・白崎　義人

少年時代を過ごした東京の下町での正月は、毎年元日に父から50銭銀貨1枚のお年玉をもらいました。そのお金で買った小銭入れは、10銭玉と1銭玉の釣り銭でいっぱいでした。

たこ揚げの道具を買い、橋の上で揚げるのが本当に楽しみでした。残りのお金で、電車で浅草へ行って露店で買い食いしたり、映画をみたりしたものです。また、羽子板と羽根を買い羽根つきもやりました。現在とは物価も違うし、遊び方も変わっていますが…。

そして、財布が空っぽになると私の正月も終わりでした。

――次回のテーマは「魔法」です――